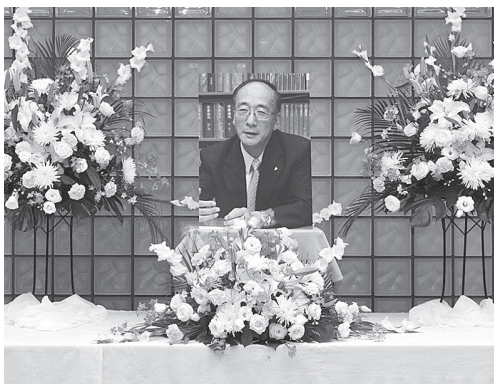
矢野建一学長を悼む

4月25日に急逝した矢野建一学長の思い出を、親しかった同僚、教え子の方々から寄せていただいた。

矢野建一学長略歴

1949年長野県伊那市生まれ。72年専修大学文学部卒業。80年立教大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。92年専修大学文学部助教授、98年同教授。文学部長（2006年～10年）を経て13年9月から学長。今年8月まで任期を残していた。



５月９日から13日まで生田・神田両キャンパスに「お別れのメッセージ」台が置かれ、学生、教職員が遺影に手を合わせ、メッセージをしたためた＝写真は生田キャンパス

お別れの会

▽日時＝6月25日（土）17時～19時
▽会場＝東京都千代田区飯田橋1の1の1「ホテルグランドパレス」2階ダイヤモンドルーム

主催は学校法人専修大学。ご香典、ご供花などは辞退いたします。問い合わせは専修大学庶務課☎03・3265・6821

中国博物館で〝大発見〟

荒木　敏夫

2004年8月29日から4日間、専修大学と西北大学による日中国際シンポジウム「長安都市文化と朝鮮・日本」が、中国陝西省西安市で開催された。矢野さんを団長とする一行は最終日の9月1日、西北大学附属博物館を表敬訪問した折、副館長の賈麦明氏の案内を受け、博物館内に雑然と置かれていた「井真成」墓誌に〝遭遇〟する。唐の都・長安で死去した「井真成」の名はその後、「歴史的大発見」とマスコミに大々的に報じられ、広く知られるようになる。

帰国したその日の夜、「とんでもないものがありましたよ！」という第一声を送ってくれた。いつも冷静な彼からは考えられない興奮気味の声。電話の内容は、「日本」という国号がみえ、それは同時代資料で確認できる最古の資料となること、正史が記していない遣唐使の一員「井真成」の名が見える。その人物が学業半ばにして唐で死去したが、葬儀に際して、皇帝から厚遇を受けたことなど、驚きのものであった。

「未公表の資料のため、精査させてもらえなかったが、墓誌の要の部分は、肉眼で読めるところはメモし、デジタルカメラにも画像を収めた」とも話す。翌日、彼の研究室でメモと墓誌の画像をみながら、「日本」「井真成」と年月日の文字を確認し、議論を交わす。画像は彼の興奮と動揺のせいか十分とはいえなかったが、指摘の通りの大発見であることを二人で再確認した。

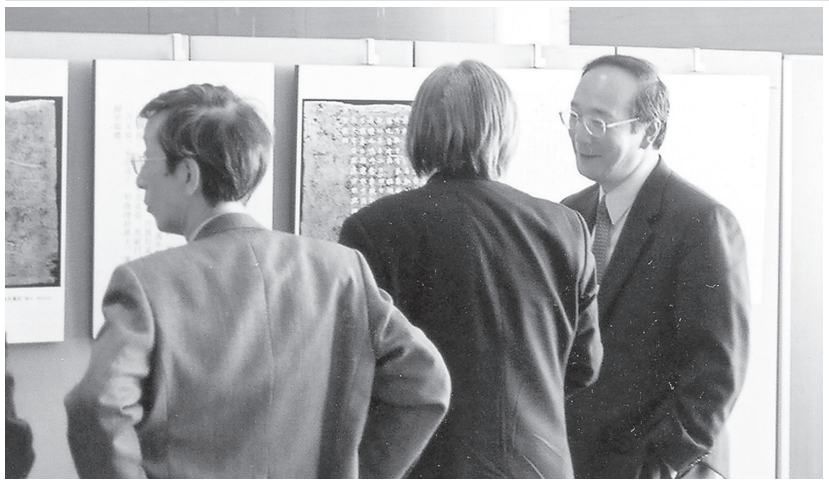
05年1月28、29の両日、西北大学と専修大学の研究者らによるシンポジウム「新発見　遣唐使の墓誌をめぐって」（有楽町朝日ホール）とセミナー「墓誌新発見記念市民セミナー」（神田キャンパス）が開催された。

彼は、歴史的発見に立ち会うことのできた幸運を、単なる立会人で終わらせることなく、二つの学術報告を用意して臨んでいる。ここにその強い意欲がうかがえ、短い準備期間ではあったが、未知の事実に迫る実証作業は高揚感に溢れ、研究者冥利につきる時間を過ごした結果が表れている。

「矢野さん、すごく楽しそう」と何人かの人にも言われていた。

その後、彼が東アジア国際関係史に関連する儀礼・文化史に研究のウイングを広げるのも、「井真成」墓誌との出会いがあったからである。突然の逝去は、彼が研究を深める機会を奪ってしまった。そのことが、私はとても悲しい。

（文学部教授）



井真成墓誌の拓本を前にする矢野教授（右端）＝2005年１月、朝日ホールで

寡黙で大きな人だった

伊吹　克己

私は1968年4月に専修大学文学部人文学科哲学コースに入学した。同期の矢野さんとのつきあいはその翌年から始まった。

彼は歴史学コースで、大学のような場所では、サークル活動などを一緒にしていなければつきあいは生まれにくい。しかし、時は「学園紛争」の時代。討論集会やデモなどで、歴史学コースにいる静かな男とのつきあいが生まれた。その男が矢野さんである。

このつきあいは卒業を機に一旦切れる。私は当時新設された本学の大学院に進学したが、まだ大学院のなかった歴史学コースの学生は、他大学に行くしかなかった。

彼とのつきあいが再開し、「この寡黙な男が」と思うような積極的な発言をして驚かせるようになったのは、彼が文学部助教授として本学に赴任してからである。彼の方から私に近づいてきた。古い教員室で旧友に再会した私は、すっかり驚いてしまったのをありありと覚えている。

そのころ私は二部の教務委員長を引き受けていた。当時所属していた商学部が縁で就任したのだが、改革委員会を作ることになった。そのためには全学部から委員を集める必要があったのだが、文学部には困った。二部に手がかりがなかったので、どういう理由で誰に声をかけてよいか分からない。思いあまって矢野さんに声をかけたところ、二つ返事で引き受けてくれた。彼とのつきあいがより深くなった。

矢野さんとは時々二人で飲みに行ったが、それ以外はもっぱら二人とも授業のない水曜日に電話で長話をした。進学塾の名物講師だった彼は、大学入試の状況などをよく知っていた。彼との話ずいぶん目を見開かされた。

最初に学長選出馬の話を彼に持ちかけたのは私だ、と彼は言っていた。だがその時、彼は怒った。ご家族のことが脳裏を走ったに違いない。新宿のデパートの上にあったレストランで、その時の彼の表情を私はよく覚えている。

昨年あたりから彼は「身体が疲れる」と私に訴えていた。亡くなる一カ月前くらいに電話で話したときに、私は事情を重く受け止めて「お前の意向に従うから早く決断をした方がいい。俺はそれに従う」と返事をした。しかし遅すぎた。今は天を仰ぐほかない。大きい人であった。やりきれないというのはこういうことを言うのだろう。

（文学部教授）

公開講座「歴史を紐とく」で３年ぶりに講演、約300人の来場者からの質問に答える＝2015年10月、生田キャンパスで

一人一人に声をかける

窪田　藍

矢野先生との出会いは、私が専修大学に入学した2001年でした。担当された「日本史概説」を受講したことが始まりだったと記憶します。

先生と初めてお話しした時のことはよく覚えています。

1年次生の秋、伊勢原セミナーハウスで行われたゼミ選択合宿の帰りに大山を巡り、阿夫利（あふり）神社や日向薬師（ひむかやくし）、白髭（しらひげ）神社などに行ったのですが、「阿夫利神社は『あめふり神社』がなまったもので、雨乞いの神社なんだよ」とか「白髭神社はもともと『新羅（しんら）神社』で、新羅の渡来人が信仰した神社なんだ」など、神社の由来について、とても面白く、丁寧に教えてくださいました。矢野ゼミに入ろうと決心したのもこの時でした。

2年次生から矢野ゼミに所属し、平安時代に編纂された法令集『類聚三代格（るいじゅうさんだいきゃく）』をテキストに、担当者が当てられた部分について発表するという形でゼミが行われました。

ゼミが終わった後の矢野研究室は、いつもたくさんのゼミ生が集まり、質問者が列をなしていました。

特に卒業論文の提出が近くなると、矢野先生は4年次生の様子をうかがいながら一人一人に声をかけてくださって、「なんだ、こんなことも分からないのか」とおっしゃいながら優しく指導してくださいました。差し入れをしてくださることもあり、ゼミ生がいつも集まる、和気あいあいとした楽しい雰囲気の研究室でした。

ゼミ合宿は夏と春の年2回行われました。春は秩父や諏訪など関東近郊、夏はほぼ毎年京都で、4年次生の卒論中間発表と史跡や神社仏閣を訪ねました。矢野先生の詳しい解説をお聞きしながらの史跡巡りは楽しいものでした。

京都では錦市場にほど近い旅館が定宿。二日目の夜は錦市場でそれぞれ夕食をとるのですが、矢野先生はいつもご家族のためにちりめん山椒をお土産にし、ご家族思いの一面を垣間見ました。

矢野先生のご指導は大学院まで11年間続きました。先生はいつもご自分より私たち学生のことを気にかけてくださっていたように思います。今でも、「どうした」「元気か」「大丈夫か」と声をかけてくださるように思えてなりません。思い出は尽きません。

矢野先生、これまで本当にありがとうございました。心からご冥福をお祈りいたします。

（図書課職員）

矢野ゼミ夏合宿で。矢野教授（前列右から二人目）の右隣が窪田さん＝2007年９月、京都・高瀬川で